



# 罪……釘付けにする人


 やまもと まこと  
 山元 眞 神父

時期外れですが、今年の聖金曜日に話したことを書きます。十字架のことです。聖金曜日は復活祭の直前の金曜日。イエス・キリストの受難を記念する日です。年中、十字架を見つめていますので、時期外れでもいいでしょう。まだ復活節でもありますし。

さて……今日は聖金曜日。イエスが十字架の上で亡くなれたことを記念しています。

わたしたちの罪というのはどういうものでしょうか。わたしは長い間、罪とは悪いことをすること、掟を破ることと考えていました。罪を犯すことはイエスを悲しませること、イエスの十字架の痛みを増すこと……そのようにとらえていました。ですから、より正しく生きることによってイエスの十字架の痛

みを和らげ、イエスが喜ばれる。そのように生きることが、キリスト者としていちばん大切な生き方だと思っていました。

この後で、十字架を崇敬いたします。今年はずである十字架を崇敬するのではなくて、新しい十字架を崇敬します。キリスト像を十字架の木に釘付けにすることを典礼に取り入れしました。後でわたしはキリスト像を木に釘付けにします。そして今年はその十字架を崇敬します。

釘付けにすることをずっと考えているときに、ひとつのことに気づかされました。それはとても大事なことで、今まで気づかなかったことです。

罪というのは釘付けにすること。つまり、その生涯の始めから最後の最後まで、低みで生き

られたイエスをそのままにしておくこと。十字架の上に釘付けにしてそのままにしておくこと。それが罪ではないかと思うのです。つまり、わたしたちが今生きてこの社会の中で、低みに置かれている人、疎外されている人、弱くされている人、病にさいなまれている人、その人たちがわたしたちは見て見ないふりをしている。彼らをそのままにしておくこと、それはキリストを釘付けにすることであり、彼らを釘付けにすることではないか。これがわたしたちの罪ではないかと思うのです。

わたしたちはふつう、罪というのは悪いことをすることだと考えます。正しく生きようと努めることは決して悪いことではありませんが、結局は自分のことだけを考えているような気が

します。自分が少しでも清く正しく生きて、結局は自分が救われることを望んでいるのです。これがほんとうの信仰なのでしょうか。

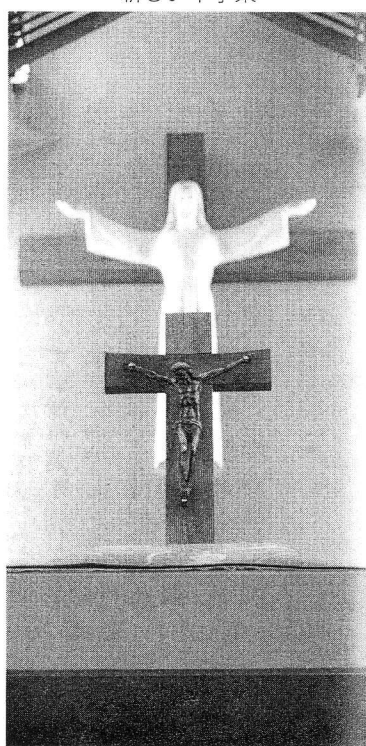
わたしたちの信仰は、弱くされている人たちと共に生きることに、共に立ち上がることに。自分の救いを目指して、自分だけ気持ちよくなって、自分だけ正しく生きて、それでいいということではないでしょう。低くされている人たちと共に生きて、そしてその状況から立ち上がることに。手をつないで共に力を分けて合つて、励まし合つて立ち上がることに。それをイエスは望んだのだと思います。人ができることはせいぜいその十字架の釘をはずすことぐらいでしょうが、結局は後はまた引き下ろすことになってしまいます。しかし、

父である神は引き上げてくださいます。復活させてください。神だけが引き上げることができるのです。

ここに私たちの信仰があります。希望があります。信仰は、自分が救われることではなくて、低くされている人たちと共に希望をもって立ち上がろうとすることではないでしょうか。

「回心して福音を信じなさい」(マルコ福音書第1章・新共同訳)。「低みに立つて見なおし福音に信頼してあゆみを起こせ」(同書・本田哲郎訳)。キリストの方に心を回して目を向けたときに、キリストの言葉に耳を傾けるときに、そこに福音があるのです。それは低いところから見るとのことです。その福音は何だったのかというところに今わたしたちは気づかされます。回心してキリストの生き方を見るときに、キリストが生きたとように生きるときに、結果として引き上げられ、復活があるので。復活は目的ではなく、わたしたちが生きた結果なのでしょう。わたしたちがこの世界から離れ、浮いたところで祈るだけであったり、自分の救いを求めるだけであれば、父である神が

聖堂中央の十字架と新しい十字架



望まれるような世界には成っていかないし、まさにイエスが言われたように「悔い改めない」と滅びてしまうでしょう。

このようなことに気づかされたときに、今の生き方ではだめだと知らされます。同時に、低みで生きること、共に生きることがどんなに難しいかということにも気づかされます。

未明に留守番電話にメッセージが入っていました。「神父さま早く来てください。死にそうです」。わたしが長い間放っていた病人の方でした。わたしが釘付けにしたままの方からでした。釘付けにされたまま生きている人がたくさんいる。その人のところに行つて、その人と共に苦しみを分かち合う。それしかないような気がします。

神が祝福してくださっている人は、釘付けにされている人であつてわたしではない。そのよ

うな人に寄り添うことによって、わたしも神から祝福をいただく。そのように思えてきました。

この後で共同祈願をして、いろんな人のために祈ったあとにキリスト像を十字架に釘付けにします。それは、わたしの罪の告白でもあるし、また、それはわたしたちの罪でもあります。子どもたちの状態、家庭の状態、教会の状態、社会の状態。共に生きれば、何かが少しでも変わるのに、そのままにして放っていることがある。そのままにして放っている人がある。

ここから引き上げてくださるのは父である神しかいない。その父が子とともに聖霊を送って助けてくださいます。信頼してあゆみを起こしましょう。

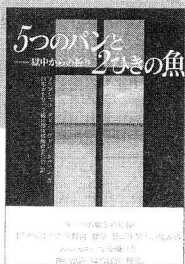
……このように話した後、十字架の真新しい釘が気になる。

「行橋教会のホームページ・http://www.yukuhasicatholic.ne.jp/」

## 5つのパンと2ひきの魚——獄中からの祈り

「私は待たない。今というこの瞬間を生き、それを愛で満たそう」。不当に監禁された13年余、密かに綴った心打つ霊的手記。

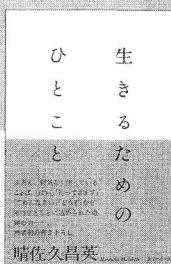
F.グエン・ヴァン・トゥワン枢機卿著  
四六判・144頁・1,365円(税込)



## 生きるためのひとこと

ことばには力がある。とりわけ口にすることばには。日頃、何気なく使っているひと言の持つ奇跡の力を探る64のエッセイ。

晴佐久昌英著  
四六判・236頁・1,470円(税込)



女子パウロ会

107-0052 東京都港区赤坂8-12-42 FAX.03-3479-3944

http://www.pauline.or.jp/